

日本旧石器学会

ニュースレター 第11号

NEWS LETTER No.11

JAPANESE PALAEOLITHIC RESEARCH ASSOCIATION

## 最近の中国旧石器考古学

—華北中・後期旧石器編—

加藤真二（奈良文化財研究所）

最近の中国旧石器考古学の調査・研究動向を述べたいが、ここでは、華北を中心とする地域の中・後期旧石器の調査・研究で筆者が関心をもつ分野を取り上げる。中部更新世以前に関しては、本ニュースレター第3号の中国科学院古脊椎動物・古人類研究所（IVPP）の衛奇氏の報告、松藤和人氏らによる大型石器群の研究報告書（2008）を、また、中国東北部については、吉林大学の陳全家氏による本学会記念講演要旨（2007）を参照されたい。

中期旧石器 旧石器捏造事件に際して日本でも話題になった、中国では中期旧石器時代は厳格で意味をもつ学術概念ではない、とする IVPP の高星氏の論文（1999）は、中国でも反響を呼んだ。しかし、論文発表後、今年で10年となるが、これを支持し、“中期旧石器”を用いない中国の旧石器研究者を筆者は寡聞にして知らない。そうした中、内蒙古シャラオソゴル遺跡や河北省侯家窑遺跡で再調査が進められている。前者は、1923年にエミール＝リサン、ド＝シャルダンらが発掘したことで著名な、シャラオソ河の溪谷に展開する遺跡群。35,340 ± 1,900年 B.P. (<sup>14</sup>C年代)、3.7万～5万年 B.P. (ウランシリーズ年代)とされ、後期旧石器とみなされていた。最近、遺物を包含するシャラオソ層群の詳しい花粉分析や磁化率の変化の測定がなされ、MIS5、黄土のレスー古土壌サイクルのS1に相当することが判明し、米浪溝湾地点では7.09 ± 0.12～12.4 ± 1.58万年 B.P. (TL法)と年代測定された。一方、1980年にIVPPの黄慰文らが発掘し、1923年出土

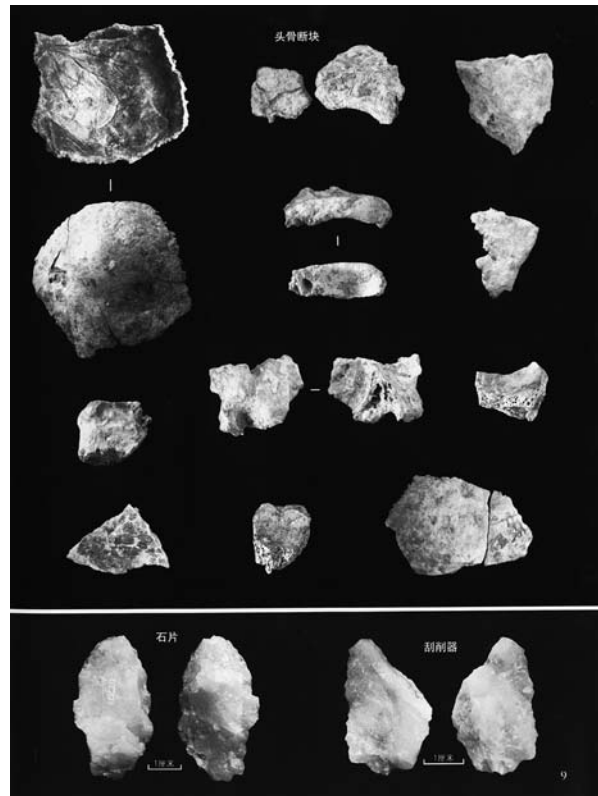


写真1 許昌人（上）と靈井下文化層の石器（下）

李占揚氏提供

品類似の各種スクレイパー類を主体とする典型的な小型剥片石器群が出土した范家溝湾地点の遺物包含層採取の砂粒は  $6.1 \pm 0.49 \sim 6.8 \pm 0.73$  万年 B.P (IRSL法)。この2地点付近では、シャラオソ層群下部から現代型新人の化石が出土している。北京大学の王幼平氏に、シャラオソゴルの年代についてうかがったところ、広範囲に分布する遺跡群であり、地点間の地層の対比が難しく、1地点の結果だけで考えるのは危険だ、と答えられた。

後者は、山西省許家窑とされていた遺跡のこと。実際は、河北・山西両省にまたがる遺跡群で、賈蘭坡氏や衛奇氏らが発掘し、多数の石球を含む石器群や古代型新人“許家窑人”が出土した74093地点は、河北省内に所在し、河北省では侯家窑と呼ぶ。現在、河北省文物研究所が調査を進めており、分布調査で梨益溝沿いに10数箇所の新地点が発見され、分布、継続年代等が広がることが判明した。また、侯家窑の再発掘では、複数の文化層が検出され、それらが従来いわれていた泥河湾層上部ではなく、それに不整合にのる梨益溝の第Ⅲ段丘堆積層に包含されることが確定した。この梨益溝の第Ⅲ段丘堆積層は桑乾河の第Ⅲ段丘堆積層に相当する。調査を指揮する河北省文物局の謝飛氏によれば、今後、地質学的な検討や花粉分析や年代測定など多角的な視点から、総合的な環境変遷史を明らかにし、その中で文化層の年代も押さえるが、ことによると、従来約10万年前とされていた年代が6万年前程度となる可能性もあるという。

最近話題になったのは、河南省靈井遺跡。1974年に周国興氏が報告した当地採集の細石刃石器群で著名であるが、2005年以降、河南省文物考古研究所が学術調査を進めている。『旧石器考古学』69に掲載された調査責任者である李占揚氏の論文(筆者翻訳)が調査成果の一端を示す。泉周辺に形成された遺跡は、上・下

2枚の文化層をもつ。主体となるのは下文化層で、華北に一般的な石英製の不定形剥片、それを素材としたスクレイパーなどの小型石器、中国南部の特徴とされる石英岩の礫を素材とした礫器など大型石器、打製骨角器、シカ、オーロックス、毛サイ、野ウマ、野ロバ等の化石などが多数出土した。さらに、2007年末、2008年春、下文化層で“許昌人”と命名された人類の頭骨化石が検出された。この化石は、バラバラにはなっているが、おそらく1個体で、ほぼパーツがそろうという。IVPPで

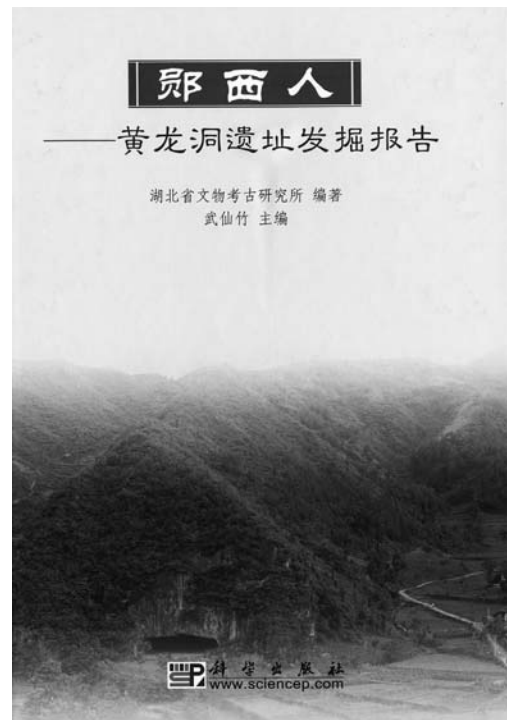


写真2 『鄯西人 - 黄龙洞遗址发掘报告』表紙

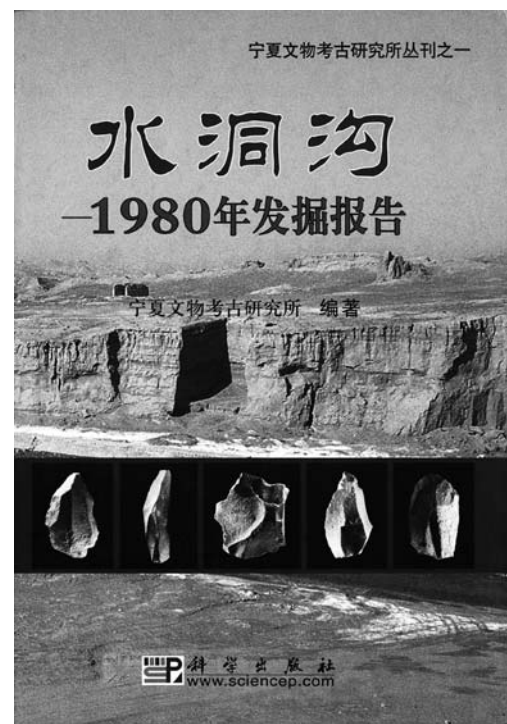


写真3 『水洞沟 - 1980年发掘报告』表紙

分析中であり、詳細は未発表であるが、李氏によれば、頭頂部への屈曲点が頭側上部にあるので、古代型か現代型の新人だろうとのことだった。下文化層のルミネッセンス年代は、約 10 万年前。

このほか、湖北省黄龍洞遺跡の発掘報告書『鄖西人 - 黄龍洞遺址発掘報告』（湖北省文物考古研究所 2006）が出された。不定形剥片や礫器、骨角器、人為的に集積し、焼けた痕や解体痕などが観察される動物骨、灰燼堆積などとともに現代型新人の歯化石が 5 点出土している。この歯化石の出土層から採取された試料のウランシリーズ年代は、 $94.7 \pm 12.5\text{Ka}$ （サイの歯）、 $103.7 \pm 1.6\text{Ka}$ 、 $103.1 \pm 1.3\text{ka}$ （石筍）。また、出土動物の最小個体数、肉量の算出など動物考古学的な分析も進められている。

こうした調査成果が公表されていけば、上部更新世前半期における、生態環境、石器群、古人類の種類やその活動などの様相や変遷を詳細に復原することが可能になる。その時、再び、東アジアにおける中期旧石器文化の有無や定義などの問題が議論されよう。

石刃技術と現代型新人 近年、寧夏回族自治区水洞溝遺跡の 1980 年調査の発掘報告書『水洞溝 - 1980 年発掘報告』（寧夏文物考古研究所 2003）が公刊されるとともに、数次にわたる新たな発掘調査がなされた。また、新疆、ロシアアルタイ、モンゴルでの中国とロシア、モンゴルとの共同調査、黒龍江省十八站遺跡の再発掘なども行なわれた結果、中国の西、北方に存在するムスチエ文化の系統を引く石刃石器群が認知され、それが中国北部・東部に伝播してきた可能性が説かれるようになってきた。一方、中国国家博物館の安家媛や筆者は、従来、剥片石器群とされてきた中国北部の後期旧石器石器群に石刃技術を見出した。今後、中国の後期旧石器文化には石刃技術は存在しなかったという既成概念は修正されていくとともに、先述した中期旧石器に関する議論とも関わって、石刃技術、そして現代型新人の中国での出現と拡散が重要な論点となると予想される。ここでは、シャラオソゴルの米浪溝湾地点、范家溝湾地点付近出土の人骨、鄖西人など、古い年代をもつ現代型新人の解釈も問題となっていくだろう。

細石刃文化 近年、細石刃文化に関する資料の蓄積や研究の深化が著しい。泥河湾盆地では、河北省文物研究所がこの地区の細石刃石器群では最古となる  $18,085 \pm 235$  年 B.P. と測定された二



写真 4 霊井の細石核（李占揚氏提供）

道梁遺跡を発掘した。小型舟底形細石核による細石刃技術、荒屋型彫器、舟底形石器、ナイフ形石器をもつ（謝ほか『泥河湾旧石器文化』花山文芸出版社、2006）。

山西省中西部から陝西省南東部にかけての黄河兩岸地区では、山西省柿子灘遺跡群、陝西省王龍辿遺跡などで調査が進む。柿子灘では、山西省考古研究所、山西博物院などにより、黄河支流の清水河に沿って25箇所の地点が発見された。ここでもS12地点出土の小型舟底形細石核による細石刃技術を保持する石器群が古い（16,050 ± 160 ~ 19,375 ± 60年 B.P.、趙静芳『考古学研究（7）』223 - 231頁、2008）。陝西省考古研究院、中国社会科学院考古研究所が調査する王龍辿では、角錐状細石核による細石刃技術をもつ石器群が最下層で出土した。初歩的な年代測定では2 ~ 1.5万年前。

また、河南省中部、黄淮平原に所在し、華北地域最南の細石刃石器群の1つでもある、先述した靈井遺跡の石器群も角錐状細石核が主体を占める。最近、李占揚氏が、周国興1974年報告の資料を含んでいた井戸掘削の廃土を掘り出して、多数の石器、骨歯牙器、赤鉄鉱、動物化石を回収している。ツールは、スクレイパー類を主体とし、石刃素材のナイフ形石器などが含まれる。細石刃関連資料は、現在の発掘区では未検出だが、李氏は、S0相当層よりも下位にある上文化層に由来し、約1.5万年と考えている。

どうやら、1.8 ~ 1.5万年前ごろの華北の細石刃文化は、楔形細石核をもたず、舟底形、角錐状の細石核による細石刃技術が主体となるようだ。泥河湾盆地、黄河兩岸地区で、両面調整ブランクを中核とする細石刃技術をもつ石器群が出現するのは、ともに約1.4 ~ 1.3万年前であり、約1.1万年前ごろにピークを迎える。また、黄淮平原の河南省大崗遺跡では、このピーク時に並行するS0で、小型舟底形細石核、楔形細石核、小型両面・片面調整尖頭器をもつ石器群が検出されたが、これは山東・江蘇両省にまたがる沂河・沭河流域の石器群と類似する。

こうした成果の蓄積が進む中国細石刃文化に関しては、謝氏や李氏のほか、北京師範大学の杜水生、吉林大学の陳勝前、カナダ・オンタリオ博物館の沈辰などの各氏らが積極的に研究を進め、多くの論文を発表している。ただ、筆者には、こうした新進気鋭の研究者の論調にも、山西省の丁村77：01地点や下川遺跡群の不確実な古い年代や故・賈蘭坡氏が提示した細石器華北起源説のくびきを感じられるのが気がかりである。

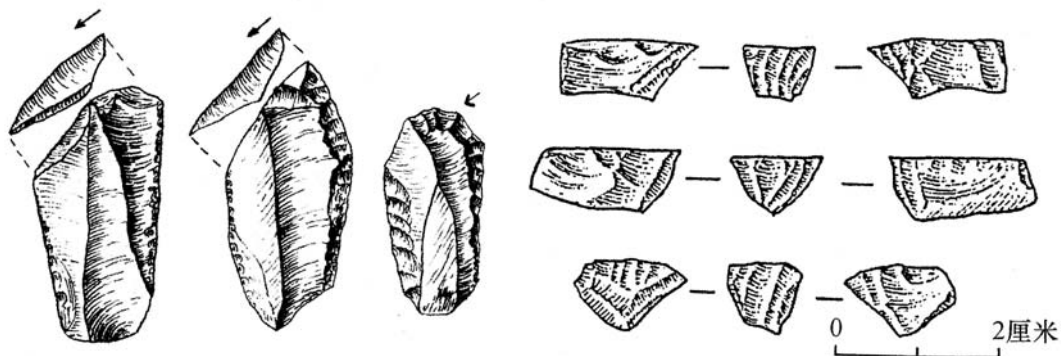


図1 二道梁の荒屋型彫器（左3点）と柿子灘S12地点の細石核（右3点）

（謝ほか2006、趙2008より）

## 日本旧石器学会の方向性と小学校 社会科教科書問題の対応について

小学校の社会科教科書は最近縄文時代の内容がようやく記載されることになったそうですが、旧石器時代文化については未だその内容が記載されるような見通しは聞いておりません。この背景の一つとして2000年に発覚した藤村新一の前・中期旧石器の捏造が国指定史跡であった宮城県座散乱木遺跡まで及ぶことによって、考古学とりわけ旧石器時代文化研究の社会的信用を失墜させたことは記憶に新しいことです。この点日本考古学協会は迅速に前・中期旧石器問題特別委員会を設け、検証作業にあたり、2003年には捏造事件の検証結果が報告され、一応の決着を見たことは承知のとおりです。しかるに今なお未解決とする意見も見受けられることから、この問題については旧石器時代文化研究の信頼回復のために真正面から取り組んでいかねばなりません。

そのようなことから、この痛ましい事件を反省し、日本旧石器文化研究のあるべき姿を改めて正すことを骨子の一つとして2003年に日本旧石器学会が発足しました。稲田孝司初代会長は、1. 日本旧石器文化研究の進展、2. 関連自然科学との連携、3. 国際的な研究の連携を掲げ、①査読制による会誌『旧石器研究』の刊行、②「記念講演・研究発表・テーマに基づいたシンポジウム」の開催、③会員間の連絡紙としての『ニュースレター』の刊行、④旧石器時代における遺跡数の見直しとデータベース化、⑤地域学会との記念講演・研究発表・シンポジウムの共同開催、⑥ロシア・中国・韓国・日本の4カ国によるアジア旧石器協会の設立にともなう研究発表など様々な取り組みがなされ、学会としての役割を大いに担ってきました。

このたび私は会長に就任するにあたり、推進されてきた先の3点に加え、小学校社会科教科書に

おける旧石器時代文化の内容が記載されるよう尽力したいと考えています。というのは地元の図書館で小学社会6上の5社が発行している教科書(平成16年3月10日文部科学省検定済・平成20年1月15日～2月10日発行)を見て驚きました。教科書には「米作りのはじまりと国の統一」(大阪書籍株式会社)「米づくりの始まりとくにの統一」(光村図書株式会社)、「米づくりは世の中をどう変えたの」(日本文教出版株式会社)、「米づくりのむらから古墳のくにへ」(東京書籍株式会社)、「国づくりへの歩み」(教育出版株式会社)といったような見出しであり、あたかも国の形成が文化のはじまりと見なすような内容が記載されておりまして、旧石器時代の内容は認められませんでした。

日本旧石器時代文化研究の歴史は群馬県岩宿遺跡発見・発掘調査から今日で60年を数え、各地域で多くの発掘調査やその出土品をもとにした着実な研究や普及活動によって後期旧石器時代文化の歴史的内容が明らかになっています。それ故日本の基層文化を形成する旧石器時代文化の内容を小学校社会科教科書に反映させることは自国の真の歴史を正しく知るうえで非常に重要なことと考えます。そのために、教科書掲載の状況を現状把握したうえで、日本旧石器時代文化研究の成果と普及活動を積極的に推進していく必要があります。

教科書問題については日本考古学協会でも担当理事を配置して、現行の教科書等を分析して多くの問題点を抽出し、その対策案も積極的に講じられています。日本旧石器学会としても旧石器時代文化については自主的に考えることは当然のことですが、日本考古学協会の活動とも歩調をあわせながら進めていきたいと考えていますので、ご理解とご協力をお願い致します。

2009年3月17日

日本旧石器学会

会長 白石浩之

## 2008年度の国内旧石器石器時代遺跡調査の動向

本年度の旧石器時代遺跡の発掘調査について簡単に概観してみたい。

北海道では、遠軽町旧白滝3遺跡で同地域ではこれまでにない層厚ときわめて良好な堆積状態を示す旧石器時代層が検出され、台形様石器を伴う石器群、広郷型細石刃核を伴う石器群と舟底形石器を伴う石器群、小型舟底形石器を伴う石器群が重層的に出土した。詳細な検討はこれからであるが、編年研究への寄与が期待される。石狩低地帯の東、馬追丘陵の西縁部一帯は近年、旧石器の出土例が増えており、昨年においても複数の遺跡で確認されている。このうち、千歳市アンカリー7遺跡では広郷型細石刃核を伴う石器群が、同市祝梅川上田遺跡では札滑型細石刃核を伴う石器群が出土している。常呂川流域にある北見市吉井沢遺跡の調査では搔器を主体とする石器群が出土している。

東北地方では、下北半島の北東端に位置する安部遺跡(洞窟)で、大型偶蹄類の白歯、焼骨などが出土した後期更新世の土層からナイフ形石器が1点発見されている。人類の活動痕跡に動物化石が絡む可能性のある遺跡として今後の調査が期待される。福島県笹山原遺跡No.16では台形様石器、基部加工ナイフ形石器、局部磨製石斧などを含む石器群に伴う焼き火跡採取炭化物の年代測定分析が行われ、 $27,710 \pm 120 - 29,950 \pm 150$ y.B.P.の範囲にまとまることが報告されている。福島県荻原遺跡では基部加工ナイフ形石器、局部磨製石斧などを伴う石器群が出土している。

関東地方の調査事例は全体に少ないが、重要なものが見られる。北関東では3年目を迎えた栃木県矢板市の高原山黒曜石原産地遺跡群剣ヶ峯地区遺跡が注目される。この遺跡は高原山山稜上に展開する標高1.400m程の旧石器時代の黒曜石原産地遺跡であるが、2007年に検出された土坑は $^{14}\text{C}$ 分析の結果、旧石器時代の所産との確定はできなかった。2008年の調査では、黒曜石槍先形尖頭器の製作址が検出され、大型槍先形尖頭器も出土している。今後遺跡の空間的、時

間的広がりへの追及が期待される。南関東では、埼玉県三好町の中東遺跡で黒色帯中から良好な石器群が出土している。東京都府中市の武蔵国分寺跡関連・武蔵台遺跡の調査も注目される。X層で80点の資料が出土しているほか、V層IV下段階の石器群及び槍先形尖頭器石器群は出土点数が1万点を越える。神奈川県では相模原市で調査事例が多い。B4層相当層の石斧製作址発見で注目された津久井城跡馬込地区の対岸に位置する小保戸遺跡・大保戸遺跡ではL1S層～B1層下部にかけての石器群が出土しており、当麻遺跡では細石刃石器群等、古淵B遺跡ではB0層上面～L1H層で槍先形尖頭器を含む石器群が1,084点出土している。

中部地方も調査例は少ない。岐阜県下呂市で下呂石の原産地踏査が行われ槍先形尖頭器等が採集されているほか、愛知県田原市宮西遺跡の調査で縄文時代草創期の遺物に混じって、旧石器時代のナイフ形石器や細石刃核が出土している。

近畿地方では旧石器時代を目的とした調査は基本的に行われておらず、新資料も少ない。中・四国地方でも調査例は少ないが、広島県三次市和知白鳥遺跡、段遺跡、庄原市向泉平川1号遺跡などの発掘調査が行われ、後期旧石器時代前半期を中心とする石器群が検出された。出土量は多くないが、今年度報告書が刊行された島根県原田遺跡ともに中国山地中部の様相解明に新たな資料を提供するものと期待される。

九州地方では、近年、宮崎県、鹿児島県を中心に多くの調査が実施されてきたが、本年度は一段落の様相で、各県とも調査例はわずかである。そうした中で、嘉瀬川ダム建設に伴って現在調査中の佐賀県地蔵平遺跡の成果が注目される。遺跡は河岸段丘上に立地し、良好な堆積状態を示している。一次堆積のATの上下から複数の石器群が検出され、礫群、土坑を伴っている。これまで、西北九州では層位的な編年が困難な状況にあったが、本遺跡の調査成果が今後の研究の進展に大きく寄与するものと期待される。また、長崎県福井洞穴遺跡では継続調査が行われ、洞穴前庭部の5～7層から遺物22点が出土している。

本稿のために各地の研究者から情報を頂きました。お礼申し上げます。

お し ら せ

2009年度日本旧石器学会総会、記念講演、一般研究発表、シンポジウム、ポスターセッション、遺物見学会は、下記の日程で、2009年6月27日(土)・28日(日)に鹿児島県霧島市の鹿児島県立埋蔵文化財センターにおきまして、開催いたします。なお、今回は地域研究の発展と地域研究会との連繫強化を図ることを目的として、九州旧石器文化研究会と共同で主催いたします。

第7回総会、記念講演、一般研究発表、シンポジウム

主 催 日本旧石器学会・九州旧石器文化研究会

場 所 鹿児島県立埋蔵文化財センター

日 程

6月27日(土) 12時30分～17時45分

総 会 (12時30分～13時20分)

一般研究発表 (13時30分～15時25分)

1. 直谷岩陰・福井洞窟の発掘調査報告

川内野 篤

2. 西アジア終末期旧石器時代の竪穴住居—シリア、デデリエ洞窟出土ナトゥーフアン建築を中心に—  
西秋良宏・仲田大人ほか

3. 微細石製遺物密集部の偏在に基づいた集中部分析について  
絹川一徳

4. 押圧による細石刃剥離のための押圧具と固定具の復原—北海道白滝遺跡群の細石刃技術にかんする技術学的分析—  
大場正善

記念講演 (15時25分～16時15分)

南九州の環境変遷史

井村隆介 (鹿児島大学理学部教授)

シンポジウム趣旨説明(16時15分～16時25分)

研究企画委員会

遺物見学会 (16時30分～17時45分)

懇親会 (19時00分～21時00分)

6月28日(日) 9時30分～15時00分

シンポジウム 日本旧石器学会・九州旧石器文化研究会共同企画

南九州の旧石器時代石器群—「南」の地域性と文化の交錯—

発 表 (9時30分～12時15分)

1. 南九州の後期旧石器時代前半期石器群について

鎌田洋昭

2. 南九州の後期旧石器時代後半期石器群について

馬籠亮道

3. 列島南辺における細石刃石器群の成立と展開—畦原と加治屋園にみる地域性—

松本 茂

コメント

宮田 剛・杉山真二

4. 韓半島—九州の旧石器時代石器群と文化の交錯

張 龍俊

5. 東南アジアの後期旧石器時代：石器群と前後時期との画期を焦点にして

西村昌也

コメント

木崎康弘・佐藤宏之

パネルディスカッション(13時20分～15時00分)

ポスターセッション

日 程 6月27日(土)・28日(日)

\*コア・タイムは28日の昼休み時間です。

1. 今峠型尖頭形剥片石器の生産過程

阿部 敬

2. 日本列島における出現期石鏃の伝播と系統—東北地方から九州島中部を結ぶホライゾンの策定—

及川 穰

3. 港川フィッシャー遺跡出土の後期更新世人類の下顎骨について

海部陽介・藤田祐樹ほか

4. 旧石器遺跡の年代推定に関連するテフラの熱ルミネッセンス(TL)年代測定

下岡順直・長友恒人

5. 植刃器製作実験とその可能性

芝康次郎・大場正善ほか

6. 韓国における旧石器考古学の新進展—レス-古

土壌編年から見た前・中期旧石器— 中川和哉  
7. ジオアーケオロジによる後期更新世／後期  
旧石器時代の編年—気候変動・火山灰層序・地  
形発達・放射年代— 野口 淳

8. 港川人下肢骨と縄文人下肢骨の比較  
藤田祐樹・水嶋崇一郎ほか  
9. 中国における旧石器考古学の新進展—レス-  
古土壌編年から見た前・中期旧石器—

麻柄一志  
10. 古本州島における国府系石器群の広がりとその  
背景 森先一貴  
(五十音順)

申し込みは別添のハガキにご記入の上、5月30日(土)までに、事務局までお申し込み下さい。また、やむを得ず欠席する場合は、会則第5条により、欠席の委任状を含め全会員の5分の1以上の出席をもって総会が成立しますので、同ハガキ下段に記載された委任状に記入、捺印のうえ投函願います。

また、宿泊及び航空券などは旅行会社が斡旋します。本誌同封のご案内をご覧ください。

### 会費納入のお願い

日頃より日本旧石器学会の運営につきましてご理解、御協力をいただき、ありがとうございます。日本旧石器学会では会費は前納を原則として運営をさせていただいております。本学会では会計年度の決算期日にあたる3月31日の時点から遡る3年間にわたり、会費未納の会員の方には、ニュースレター、会誌の配布を停止させていただきます。なお、その後、本会の請求に応じて、未納分会費の納付手続きがなされた時点で配布の停止は解除されます。会費を長期に未納されている方々につきましては、速やかに所定の会費の支払い手続きをなされますようお願い申し上げます。

なお、2009年度会費の納入をお願い致します。

年会費 5,000 円で、振込先は、日本旧石器学会  
郵便振替番号 00180 - 8 - 408055 です。

### 住所変更のお願い

転居をされた方は必ず住所変更の手続きをお願い致します。事務局までメール等でご連絡ください。

### 編集後記

昨年6月に新役員による体制がスタートしてすでに1年近くが過ぎました。各委員会の構成員も大きく交代しましたが、引継ぎは大きな混乱なく行われたようです。

今号は本年度のアジア旧石器協会が中国で開催されることもあり、加藤真二会員に中国の中期～後期旧石器時代研究の動向について執筆していただきました。

ニュースレターも早いもので第11号となります。これまで、各年度の旧石器学会報告、各委員会の活動報告・活動計画ならびに日本、中国、韓国、ロシアなど東アジアの調査、研究動向を中心とした紙面作りを行ってきました。第9号からは旧石器研究と密接な関連学問の研究の現状と課題を紙面作りの柱の一つに加えしました。今後、各地の調査、学会、展示会などの情報をいち早くお伝えし、会員の生の声が掲載できるよう、速報性、機動性の面で検討が必要であると考えています。より良い紙面作りのため、皆様からの投稿、意見をお待ちしております。(史)

日本旧石器学会ニュースレター  
第11号

2009年3月31日発行

編集：日本旧石器学会ニュースレター委員会

加藤勝仁・谷和隆・藤野次史・山原敏朗

発行：日本旧石器学会

事務局：明治大学博物館 島田和高

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1

アカデミーコモン地階 電話：03-3296-4431

E-mail ma96018@mics.meiji.ac.jp